

岡崎市美術博物館ニュース〈アルカディア〉

89

WINTER
2022

ARCADIA

OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS



花と鳥のかたち

特任館長 榎原悟

(承前)問題は、唐絵草虫画に淵源があると見た、これらの虫についての図像情報を、光則が何処で、何から得たかである。それが説明できなければ、そもそもこの推定自体が成り立つこともないはずなのだ。果たして以下の話で読者の納得が得られるや否や。

いや、実際問題、光則は何から情報を得たのか。土佐一門内に蓄積された粉本からその可能性もないわけではないだろうが、その点も含め実はわたしは、一点それらの情報元となつたのではないかと、と睨む作品を押さえている。もとよりその根拠は薄弱で、わずかに虫のかたちの類似を上げるに過ぎない。妄想との譏りは免れ得ないかも知れない。とは云え、そうした虫の所縁を探ることを手掛かりに、花鳥画の流れにもう一本の補助線を引き得たのでは、と自負する。となれば、さらに妄想を逞しゆうするのとも手と云うもの。批判は承知の上である。

取上げたいのは、ここでもページニア本押絵貼屏風。どうもこの屏風に示された図像は、いろんな作品のそこ、ここに顔を出す。名物なるが故であろうか。というより、そうであればこそ、名物と呼ぶに相応しい。筆者を、同じ土佐派の先達土佐光信と伝えているのも、この際まことに興味深い。そのページニア本、左隻右より才三扇、鼻高栗鼠が瓜を喰



図2



図1

い散らす。鼻高栗鼠はむろんのこと、その傍らの南瓜も当時なお舶載以前で、これらが何らかの図像情報を原図に描かれたことは明らか。しかもこれを描いた絵師が、鼻高栗鼠と南瓜との個別の情報を、自ら組合わせて一図にまとめたことのみも無理があるからと、そうした図自体が舶載されたとし、それを根拠に他の十一図すべてが、同様の事情のもとで臨模されたと考えた(「捕食のかたち」。「蜥蜴を描く」)。その鑑識の、そもその発端となつた一図だ。描かれた虫たちも、当時のわが国における虫に対する視線の熟成度を知れば、その原図に既に描かれていたことは、全く疑う余地もない。いや、できるはずもなく、その原図に既に描かれていたことは、全く疑う余地もない。注目すべきは、その虫たち(図1)。地上には飛蝗が歩み、左上方、中空にも飛蝗が飛ぶ。羽音が聞こえてきそうなその姿は、実に印象深く、一度でも見たら決して忘れない。共に飛蝗としたが、これは、花鳥画の世界才三巻『水墨の花と鳥』(学習研究社一九八二年)での同定に従つたままで、地上の一匹は頭部の特徴あるかたちから文句なく飛蝗だが、中空のそれは果たしてどうか。しかも中空のその後肢才三関節(そう呼んでよいのか否かも不明だが)以下、先端までが鮮やかな紅に彩られている。地上の一匹の後肢はそうなっていないから、二匹を同種の飛蝗とみることが許されるのか。

素人のわたしでは、これ以上の穿鑿は難しいのだが、敢えてこの二匹の虫にこだわつてみたのも、実はこの二匹に酷似する虫の姿が、『雑画手鑑』の②に描かれているからである(図2)。地上の飛蝗と左上方に飛ぶ一匹、両者の位置関係はページニア本のそれとほぼ一致する。さらに鮮やかな紅が印象深い後肢も同じだ。ただし中空の一匹の頭部は、飛蝗のそれとは異なり、触覚の長いことから、こちらの一匹は間違いなく飛蝗ではないだろう。蠡斯に近いのかも知れない。

だが、いずれにせよ、『雑画手鑑』②の虫たちが、ページニア本か、二条城にあったという上覧本か、はたまたそれら総ての原図となつた特別詠えの舶載本なのかは不明ながら、そこからの図像情報を原図に描かれたものではなかったか。そのことから、先に指摘した山田道安が写した一模本(茨城県立歴史館蔵)の、同じ虫の後肢が鮮紅色ではなかったことの持つ意味は大きい。やはり、道安本は、模本とは云え、原図とは少し距離を置くものであろう。

むろん、こうした指摘に対しては、
—確かにそうかも知れないが、そもそも二匹の虫の描写自体が偶然の一致ではないか。この程度の相似性など、それぞれの絵師が当該の虫たちを写生すれば、結果的に起こり得る事態ではないか、と。

しかし、二匹の虫の位置関係と、そのうちの二匹、空中を飛ぶその後脚が紅色である点まで一致することを、偶然の一語で済ませるわけにはいくまい。しかも当時であつては虫たちを描くこととそれ自体が、既に特殊であつた事情を考慮すれば、光則がこれらの虫たちを描くに、先行図像すなわち唐絵草虫画を原図にしたことは、もはや間違いない。読者の納得もこれで得られたはずだ。となる池辺の殿さま蛙がどうにも気に掛かる。ページニア本の同じく、左隻才三扇にも、かたちを似通わせた蛙が蓮の葉に座っていることを指摘しておこう。

ちなみに土佐光則は、父とも師ともみられる光吉(一五三九〜一六一三)に従い都落ち、寛永十一年(一六三四)に復帰を果たすまで堺の地にあつた。いわば、これらの虫たちは唐よりやって来た堺の虫たちとでも云うべきか。

鷹の縁えん

ところがバージニア本（ないしはそれに関連する諸本）と堺との係わりを窺わせるものは、他にもあった。さらに意外なところに、その痕跡を留めていたのだ。改めてその左隻左端の一図を見て欲しい。鷹が鴨を襲わんと急降下、鴨は水面に逃げ断末魔の悲鳴を上げる（図3）。見開いた目、苦悶の表情が痛々しい。まさしく捕食のかたち。先に見た右隻才二扇、雀を銜える鷗同様、衝撃の一図だ。これを見た室町人の驚きは如何ばかりであったことか。

その一図を見て、わたしの即座に思い出すのが、曾我蕭白（一七三〇〜八一）の『鷹図押絵貼屏風』だ。雪積もる枯木の陰にひっそりたたく鷹の一図など、背が栗立つような、底知れぬ怖ろしさが感じられ忘れ難いが、問題としたいのは、それではない。この一図（図4）だ。鴨から雉子に変わっているが、捕食者鷹と、その鋭い攻撃から逃れんと必死の形相の雉子が描かれる。まさしくバージニア本と同じ内容、同じ構図である。しかも急降下する鷹は、左右反転させているものの、びたり一致する。先端を分岐させた波頭の形状にも、両屏風、通じるところが少なくない。となれば両者を結びつけ、バージニア本の鷹を、蕭白の鷹の図像的淵源と見なしたくもなるのだが、両者の時代的隔たりに余りに大きい。しかもこの押絵貼屏風、その名のように全十二図よりなり、枯木の陰に隠れるように立つ鷹をはじめ、さまざまな姿の鷹が登場する。それらがすべて蕭白の趣向と造形になるとみれば、急降下する鷹の図像の一致も、偶然の結果なのかも知れない。

だが、本当にそうなのか。それを質す手掛りが、蕭白の名乗りにあった。彼は本性を「三浦」と云うが、三十歳の時には既に「曾我」と称していたという（辻惟雄「研究余録 興正寺の蕭白」『国華』九〇五号 一九六七年）。つまり、「曾我」氏は、蕭白が絵師として立身していく上で選んだ姓であったのだ。そう名乗ることが出世に有効だと思っただ



図4



図3

らである。「白雪舟五代」を標榜した等伯と同じだ。その曾我氏とは、言うまでもなく、

兵部墨谿―夫泉（式部）宗丈―兵部紹仙―宗誉―紹祥

と続いた画派である。墨谿以下三代は「蛇足」とも号した。その号を踏まえ蕭白は「蛇足軒」とも「蛇足十世裔苗」とも称した。自らを室町時代以来の名門・曾我派の直孫ちくそんとしてここに位置付けていたのである。

そしてここからが重要なのだが、蕭白は、そうした自らの位置を担保するものとして、どうやら「鷹図」を考えていた点である（狩野博幸「曾我蕭白」『日本の美術』二五八号 一九八七年 佐藤康宏「蕭白新論」『若冲・蕭白』名宝日本の美術二七 小学館 一九九一年）。いや、蕭白は、さらにそこから妄想を逞しゅうし、「徽宗の鷹」として名高い、あの北宋の皇帝徽宗までも自らの画派の一人とした。いやはや、ここに妄想も極まれりと云うところだが、蕭白は大真面目にそう考えたのであろう。自らの権威付けにもなるからである。その「鷹の絵」である。当然、蕭白は制作に精進を重ねたに違いない。遺された蕭白「鷹図」の多さと質の高さが、何よりそれを物語る。制作に際して粉本の使用もあつたはずだ。と云うより、そうした鷹の粉本を所有すること自体が、「蛇足十世」を称するための拠りどころでさえあつた。言うまでもない、只、古絵本、旧記などを自家に伝え侍る 『絵師草紙』才三段詞書 と、旧記（家譜・由緒書）と古絵本（粉本）とを持つことが、絵師として出世するために必須のことであつたからだ。

その粉本は鷹図情報『鷹図押絵貼屏風』の制作でも用いたのではなかったか。十二図・十二羽すべてで、と云うのではない。なかでも問題の急降下する鷹こそは、無駄の無い研ぎ澄まされた、まさしく典型とも云うべきそのかたちからも、粉本の使用を予測する。

とは云え肝心の蛇足が「鷹の絵」を得意としたか否か。一点たりともそれが伝わらない現状では、描いたかどうかも含め、定かでない。だが十六世紀後半から十七世紀前半の二人の曾我派絵師の活躍が、この「鷹の絵」問題に一石を投じてくれるように思ふのだが…。

その二人とは、曾我直庵とその子・二直庵。直庵は『丹青若木集』が草虫画を得意としたと伝える紹祥の子。つまり前掲した曾我派画系を継いだのが、この二人。二直庵は「蛇足六世孫」（法隆寺本『松竹梅に鷹図』三幅対の款記）と称した。蕭白の「蛇足十世」もこれを踏まえ、做つたものだろうし、曾我派が鷹を描くようになるのは直庵、二直庵からだ、と云う（木村重圭「曾我三直庵筆「架鷹図屏風」―曾我直庵・二直庵の後継者たち」『聚美』三三三号 二〇一九年）。

さらに蕭白画に見る枝の屈曲やうろを幾何学的に誇張した松の形態に、二直庵画からの影響を見るむきもある（佐藤氏前掲論考）。面白い指摘だ。後にいま一度触れてみたいので、記憶しておいて欲しい。が、それはともかく、「鷹の絵」も含め、曾我派と蕭白との係わりが確かめられるのはどうやら直庵、二直庵からであつたようだ（未完）。

図1 虫たち（飛蝗 蠢斯カ）バージニア本「鼻高栗鼠に南瓜図」より

図2 虫たち（飛蝗 蠢斯カ）『雑面手鑑』「芙蓉群虫図」より

図3 鷹に鴨図 バージニア本「花鳥草虫図押絵貼屏風」のうち

図4 鷹に雉子図 曾我蕭白筆「鷹図押絵貼屏風」のうち

開館25周年記念

美術にまつわる5つの話

—いつもそこにある—

会期：令和4年1月29日(土)～3月13日(日)

今泉 岳大



ロベルト・マッタ《炎よ、我らを食さん》© ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2021 C3673 当館蔵

多くの情報が行き交い、過ぎ去ってゆく現代社会において、私たちの暮らし、その当たり前であった日常は、いまや絶えず変化が求められています。世界にまん延した新型コロナウイルスは、私たちの行動を制限し、経済・医療の問題など個々人の生活様式を変えましめた。また地震や台風などの自然災害もまた、私たちの日常を一変させるものとして隣り合わせに在り続けています。その過程で、私たちは意識することのなかった新しい発見をすることや、考えなかったことをふと考えたりします。

美術作品を生み出す芸術家は日常の刹那に立ち現れる様々な想いを託して作品を制作します。暮らしの中にある違和感を見出すこと、誰も考えていないことを深く考えること、目に見えないものを想像すること。芸術家はそうした気持ちを作品として私たちに提示し、新しい発見を与えてくれます。

本展は、当館がこれまでみなさまに届けた「美術にまつわる5つの話」を紹介するものです。それぞれのテーマを通じて、みなさまが暮らしの中で感じる新しい日常について考え、感じ取る一助となれば幸いです。

◆混沌の話

A1

混沌／カオスに挑む展示です。誰もが自分の内側に混沌や狂気を抱えています。普段はその栓をしめて暮らしています。この展示では自分の中にある混沌や狂気を感じて、それを開放しつつ作品と共鳴させるものです。

A2

ロベルト・マッタ「炎よ、我らを食さん」一点を展示します。

A3

一点のみですが、幅約五メートルの大作です。重層的な奥行きと世界観を感じることができるとは、さすがです。

A4

マッタは自身が描いた混沌について、自分のものではないと言います。となると、それはマッタではない誰かの混沌であり、もしかしたら、あなたの混沌であるのかもしれない。見る人それぞれ

5つの話・Q&A

- Q1 どんな展示ですか？
 Q2 どんな作品が出ますか？
 Q3 一押し作品は何ですか？
 Q4 何を感じてもらいたいですか？
 Q5 学芸員として「いつもそこにある」ものは何ですか？

EVENT INFORMATION

関連イベント情報

ワークショップ

「ビジュツの話、あなたのコトバ」

ワークブックを片手に美術ワールドにとびこんでみよう！展覧会を見て考えてほしいあなたの話。作品を見て、あなたの眼の奥や手の中に生まれたイメージを、ワークブックをヒントと一緒に形にしてみよう。(楽しいクイズもあるよ！)

受付時間 | 10:00～16:00
 場所 | 当館1階展示室内、ホワイトエ
 参加費 | 無料(※ただし、当日の観覧チケットが必要です)
 参加方法 | 館内受付にてワークブックを配布

ギャラリートーク 全5回開催

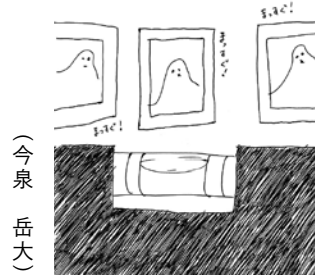
2月4日(金)、2月13日(日)、
 2月25日(金)、3月5日(土)、
 3月12日(土)

各日とも午後2時から 当館1階展示室
 (開始時刻までに展示室入り口前にお集まりください)

担当/当館学芸員
 参加費無料(※ただし、当日の観覧チケットが必要です)

内にある混沌を感じ、暮らしの中でそれとどう付き合うか考える機会となればと思います。

A5 水平器と、作品を偏りなく鑑賞しようとする心。



(今泉 岳大)

◆祈りの話



レオナルド・プラームル《キリストの割礼》
1631年 / 当館蔵

A1 主に一六〜一七世紀のキリスト教美術をご紹介します。表情豊かなキリスト教美術の作品を通じて、「祈り」の世界を覗いてみませんか？新しい発見や、お気に入りの一枚が見つかるかもしれません。

A2 絵画やステンドグラス、彫刻、メダルなど多岐にわたる作品を展示しています。

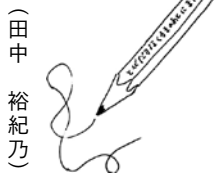
A3 レオナルド・プラームルの《キリストの割礼》です。主題のユニークさはもちろん、詳細に及ぶ描写が魅力的です。是非、少し時間をとって細部をご覧ください。

A4 すべてを理解しなければ、と気負わずにまずは純粹に作品や展示の雰囲気を楽しんでいただければと思います。当時の人々にとって「祈り」とはどのような行為であったのか、思いを馳せてみるのも面白いと思います。あなたの身近にはどのような「祈り」があるのか考えてみてください。展示室にも持っていけます。

◆他者の話



五木田智央《Secret Agent》2021年
©Tomoo Gokita Courtesy of Taka Ishii
Gallery Photo by Kenji Takahashi



(田中 裕紀乃)

A1 誰もがカメラ付きの情報端末を持ち、画面を通して多くの「肖像」を目にする現代、「肖像」はこれまでとは異なった新たな主題として拡張しています。この展示は人の姿を表現した肖像画、肖像写真を通して「他者」を再考するものです。

A2 主に3名の作家を取り上げます。ソラリゼーションという独自の技法で制作したマン・レイの肖像写真、アメリカ西海岸の明るい陽の光を感じさせるデイビット・ホックニーと、現代美術界の鬼才五木田智央の肖像画を展示します。

A3 五木田智央の顔のない肖像画です。顔のない肖像は、誰かの顔になり得る交換可能な肖像であり、自分にもなり得る肖像として私たちに迫ってくるようです。

A4 普段の生活で他者の顔をまじまじと見つめることは少ないと思います。でも肖像なら無配慮に他者の顔を観察することができ、顔という現象について考えるきっかけになってほしいです。



(今泉 岳大)

◆日常の話



長谷川瀧二郎《水仙》
制作年不詳 当館蔵

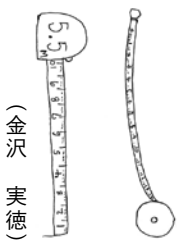
A1 日常をテーマにしています。私たちの身近にあるものが描かれた作品、親しみを感ぜられる作品を収蔵品から紹介します。

A2 油彩、版画、ドローイングなどの作品を展示します。

A3 長谷川瀧二郎の《水仙》でしょうか。小ぶりの可愛らしい画です。季節の花を部屋に飾るような感覚で、春を迎える本展の会期にピッタリだと思いい品を決めました。

A4 作品に親しみを感じていただけたらうれしいです。美術のことなんてわからないし、作品を見ることを難しいと思う人もいらっしゃるかもしれませんが、好き、おもしろい、かわいい、ふしぎだな、などという感覚で気軽に展示会をたのしんでいただければ何よりです。

A5 巻尺。持っていない時に限って測りたいものが出てくることがあるが、誰かしらを持つているという現場があるがある。



(金沢 実徳)

◆風景の話



歌川広重
《五十三次名所図会 廿九岡崎 矢はぎ川やはぎのはし》
江戸時代後期 当館蔵

A1 江戸時代以降、美術作品に表現された岡崎の風景をご紹介します。知っている風景もきっとありますよ。

A2 浮世絵・洋画・木版画のほか、現代のアートプロジェクトやまちづくりも紹介します。

A3 矢作橋を描いた浮世絵です。迫力ある矢作橋はもちろん、橋を渡るいろいろな人たちも注目ポイントです。

A4 まずは描かれた風景を楽しんでいただけたら何よりです。そこから、知っている風景かな？ どうして画家はこの風景を描いたんだろう？ など、ぜひいろいろな考えをめぐらせてみてください。

A5 展示会という正解のないものと、それを実現するために判断すること。



(酒井 明日香)

ただいま、準備中

名取春仙 役者を描く

会期 令和4年4月9日～5月15日

酒井 明日香

5



《創作版画春仙似顔集 六代目坂東彦三郎 舎人松王丸》昭和3年(1928) 当館蔵



《春仙似顔集追加 十五代目市村羽左衛門 助六》昭和4年(1929) 当館蔵

名取春仙(二八八六一―一九六〇)は、大正から昭和前期にかけて行われた新版画の出版において、歌舞伎役者や舞台俳優を描いた役者絵を手がけて人気を博しました。色鮮やかで写実的な春仙の作品は、江戸時代の浮世絵の伝統を受け継ぎながらも、新しい時代の表現を加えた近代の役者絵でした。そして役者の容貌や所作、舞台の美しさをとらえた春仙の作品は、歌舞伎の鼻筋に愛好されました。本展では春仙の代表作である《創作版画春仙似顔集》《春仙似顔集追加》を中心に、近年当館に収蔵された春仙の役者絵全四十九点を一斉にお披露目いたします。美術ファンの方だけでなく、歌舞伎愛好家のみならずにも楽しんでいただきたい展覧会です。

近年「新版画」が注目を集め、全体像を紹介するものから作家を個別に取り上げるものまで、多くの展覧会が全国各地で開催されています。「新版画」は、浮世絵の版元であった渡辺庄三郎が出版した木版画で、浮世絵の技術を用いて新しい版画芸術を生み出そうとしたものです。

春仙は渡辺庄三郎に声をかけられて、大正五年(一九一六)から新版画の制作に携わりました。山梨県巨摩郡明穂村(現在の南アルプス市)に生まれた春仙は、日本画家を目指して久保田米僊、金僊に師事し、无声会に参加しました。その後、東京美術学校日本画撰科に入学するも中退しますが、東京朝日新聞社嘱託となり、夏目漱石をはじめとした有名作家の新聞小説の挿絵を手掛けて大ブレイクしました。その後、渡辺庄三郎と出会い、版画の制作に取り組みはじめます。

江戸時代の役者絵は、スーパースターである歌舞伎役者を理想化して描くのが基本でした。役者絵を描いた浮世絵師として有名な東洲斎写楽の誇張した表現は、当時としては特殊な例になります。一方で春仙の役者絵は、とても写実的で、役者の特徴を素直によくとらえています。そこで本展では春仙の作品とあわせて、描かれた歌舞伎役者の写真パネルも参考展示することを目下計画中です。実際にどんな写真があるのかは調査中ですが、ポーズも構図も春仙の作品とそっくりな歌舞伎役者のプロマイドも確認できています。どこまで調査・展示できるのかはこれからの担当の働き次第、この記事が世に出る頃には目途が立っていることを祈るばかりです。

ミシンはイギリスで発明され、幕末にジョン万次郎によって日本に持ち込まれました。英語では「Sewing Machine (ソーイング・マシン)」と言い、「裁縫機械」という意味です。「ミシン」とは日本で作られた言葉で、マシンという発音を日本人がミシンと聞き間違えたことから、また、マシンが訛って、日本での正式名称がミシンになってしまったと言われています。

■戦時中に縫い物をする母親の姿

【写真1】シンガー社製の手廻しミシン。右手でハンドルを廻しながら左手で布を押さえて縫っていきます。下糸はなく上糸一本で縫う構造で、チェーンステッチ（単環縫い）と呼ばれる縫い方のものです。戦時中から終戦直後まで、このミシンで器用に家族みんなの縫い物をしていた母親の姿を思い出すと、と息子さんから寄贈されたものです。



写真1

■やっとの思いで手に入れた中古品

戦後、女性たちが喉から手が出るほど欲しかったのがミシン。戦中の衣類不足で、どこの家でも手持ちの衣類は使い果たしてしまったり、着尽くしてしまったりで、また、都会では農家でお米やお芋と交換してしまっていて着るものがなかったのです。まだ既製服も売っていなかったため、服は自分の家で縫うか、縫ってもらうしかありませんでした。

【写真2】かなり使い込まれた足踏みミシン。寄贈者の女性が昭和二〇年代後半に購入。当時はなかなか手に入らず、夫と二人で苦労して何軒も回って探し、蛇の目ミシン特約店でやっとの思いで手に入れた中古ミシンです。「RASTER」というメーカーの製造で、「RASTER」文字と兜の意匠が入っています。ずっと使い続け、歳を取り足の力が弱くなって踏めなくなったからと手放されました。

展示した折に息子さんに伴われて来館されたご本人が、ミシンの前に座り愛おしそうにミシンを撫でていた姿は印象的でした。一般家庭がミシンを買うようになったのは昭和三〇年代に入ってからのもので、戦後すぐにミシンを

持っている人はまだまだわざわざかでした。

暮らしの道具箱

ミシンにまつわるエピソード

伊藤 久美子



写真2

【父親から娘へ最高級ブランド品】日本で本格的にミシンの普及を始めたのは、アメリカのシンガー社で、明治三三年（一九〇〇）に日本に進出してきました。当初、ミシンは非常に高価だったので、あまり普及しませんでした。明治四〇年代に入って月賦販売の開始や国産ミシンの量産、一般向けの洋裁学校の開校があり、次第に普及してきます。

【写真3】明治三十七年生まれ的女性が父親から娘時代に（嫁入り道具ではない）買い与えられたシンガーミシン。大正一二年（一九二三）米国ニュージャージー州エリザベス工場で製造されたものです。国産ミシンでさえ高価な当時、一流ブランドのシンガーミシンは相当

な高級品でした。きっと裕福な家庭だったのでしょう。今ではアンティークミシンとしての価値も認められる逸品です。



写真3

このミシンの持ち主は、中根（旧姓河合）千代さん。昨秋亡くなられた社会人類学者で女性初の東京大学教授だった中根千枝さん（東京在住）の母親です。岡崎市両町で生まれ育った河合千代さん、岡崎空襲で両町の生家は焼失しましたが、ミシンは他家へ預けてあり難を逃れたとのこと。東京の娘宅へ移住する際にこのミシンも持参、晩年まで愛用し、千枝さんも使っていたというミシンです。故郷岡崎で母の名前と一緒に残せたらという中根千枝さんからの願いで寄贈いただきました。

ミシンにまつわるお話、いかがでしたでしょうか。

SHOP INFORMATION



飛騨高山に工房を構える「真工藝」。独自に編み出した木版手染めは、1色ずつ染め上げる一般的な型染とは違い、一つの版木にすべての色をもせて生木綿に染め付けます。その後高温で蒸して色止めし、もみ殻を詰め縫い合わせます。終始手作業で出来上がる素朴で温かみのあるぬいぐるみは、柔らかな色彩が魅力的です。和洋どちらの空間にもよく馴染み、季節のしつらえとしても活躍してくれます。

営業時間 10:00 - 17:00
定休日 月曜日(祝日の場合は営業。翌火曜日が振替定休日となります)
TEL 0564-83-5952
FAX 0564-83-5953
MAIL yagura@b-soup.com
HP <https://www.b-soup.com>



YOUR TABLE

岡崎市美術館併設のカフェレストラン『YOUR TABLE』。ガラス張りの店内には太陽の光がいっぱい入り、お酒落で開放的な空間が広がります。ランチ時には景色を愉しみながらお食事をする事ができます。展示毎にシェフ考案のコラボメニューも登場。カフェタイムにはやケーキセットや軽食などを販売中。



営業時間 11:00～21:00
定休日 月曜日(祝日の場合は営業。翌火曜日が振替定休日となります)
LUNCH 11:00 - 14:30 (L.O.14:00)
TEA 14:30 - 17:00 (L.O.16:00)
DINNER 18:00 - 21:00 (L.O.20:00) ※土日祝日のみ営業
TEL 0564-28-0141
HP <https://your-table.owst.jp>

YOU USED TO BE



ワイシャツはTPOを問わず我々の衣生活に馴染み深いものですが、ひいおじいさんの時代は少し形が違っていました。かつてのワイシャツは襟の部分を取り外すことができ、気分やシチュエーションに合わせて好きな色や形のものを取り付けることができました。この付け襟は「カラー」と呼ばれ、オシャレ好きな人が特にこだわりのポイントでした。シワがあるとみっともないので、糊を強くはってプラスチックのような硬さに仕上げる場合もありました。「カラーボタン」と呼ばれる金具で襟元に取り付けます。背中の首元にはネクタイを通すためのループが付いていました。袖先は「カフスボタン」という金具で留めました。こちらは現代でも愛用者が多いものです。古くから多種多様なデザインがありました。袖先部分も襟同様に取り外しできるように仕立てたものがありました。前合わせのボタンはへそのあたりで途切れています。当時はズボンの股上りが深く、現代ほど下まで留まる必要がなかったのです。

昭和初期ごろから襟を縫い付け、袖をボタンで留められるようにした今の形に近いものが出回るようになり、戦後になると次第に古い形ものは淘汰されていきました。

(米田)



岡崎市美術館

開館時間

午前10時～午後5時
※最終の入場は閉館時間の30分前まで

休館日

月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後休日でない日)
年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

HP

<https://www.city.okazaki.lg.jp/museum>

ARCADIA OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS

【岡崎市美術館ニュース/アルカディア】 第89号 2022年1月発行
編集・発行 岡崎市美術館
〒444-0002 愛知県岡崎市高陵寺町峠1番地 岡崎中央総合公園内
TEL 0564-28-5000(代表)